

巻頭言

「言語と民族の多様性」

町 田 健

1993年に創設された名古屋大学留学生センターは、昨年2013年10月をもって改組され、留学生に対応する教員組織としては、国際教育交流センターと国際言語センターという2つの組織が誕生した。本学における留学生数を3000人に増加させ、国際化を一段と促進させる事業を強力に推進する取組をさらに前進させる手段として、新たな国際組織が有効に機能することを願うものである。

我が国は江戸時代の初期以降、中国（清）とオランダのみに国交の対象を限定する政策を実施し、それが江戸時代末期まで継続した。このような閉鎖的な状況が、日本の国際化を阻害したことは言うまでもないが、200年以上にわたる鎖国が、日本の言語および文化の独自性を特徴付ける要因になったこともまた確かである。実際のところ、現代日本語の特徴は、ほぼ江戸時代に形成された日本語のそれを受け継ぐものである。

現在、全地球的な規模での国際化が進展しつつあるが、この際に問題となるのは、各民族がもつ文化の独自性を確保すべきかどうかということである。古代ギリシアは、紀元前10世紀以前にバルカン半島の南部に、数回にわたってギリシア語を話す民族が移住してきたことで形成されたが、紀元前3世紀までは、各方言がそれぞれ独自性をもって使用されており、アテネの方言が優勢ではあったものの、共通ギリシア語のようなものは存在しなかった。ところが紀元前3世紀に、アレクサンドロス大王が大帝国を築き上げた後発展したヘレニズム文化では、アテネの方言を基礎としたギリシア共通語（コイナー）が形成され、この結果かつてのギリシア語諸方言やギリシア語以外の言語の多くを消滅させた。

ローマは、特に紀元前の共和制時代に、地中海を取り巻く広大な地域を版図に組み込んだ。すでにギリシア語圏であった東地中海世界がラテン語化することはなかったが、西地中海世界は、イベリア半島、フラン

ス、イタリア半島、そして北アフリカのほぼ全域がラテン語の使用地域となった。

現代のイスラム世界の共通語はアラビア語であり、イラク以西の中東および北アフリカのほぼ全域でアラビア語が用いられている。この地域でかつて使用されていたラテン語、ギリシア語、エジプト語等は、アラビア語の前に消滅した。

ヘレニズムのギリシア、ローマ、イスラム、これらの世界の内部では地域相互の交流が活発であり、その交流を支えたのが共通語であるギリシア語、ラテン語、アラビア語である。共通語がなければ、密接な相互交流は困難に直面することになる。

日本が属するアジアや欧米の世界においても、各国との交流を実質化するためには、共通の言語を使用することが必要となる。現代の世界でその役割を担うのが英語であることは言を待たない。つまり、現代世界においてすべての国々や民族が英語を使用するようになることが、国際交流を最も効果的に実現することを可能にする。

しかしもちろん、それでは個々の地域や民族の独自性が毀損されるか、あるいは消滅する結果を招くことになる。民族の独自性が尊重されるべきだと考える人間にとっては、英語のみが君臨する世界はありうべからざるものであろう。しかしヘレニズムもローマもイスラムも、民族の個別性を埋没させることで文明を築いた。そしてこれらの世界が人間にとって唾棄すべき存在だと見なすことはできない。だとすると、英語が唯一の言語として諸民族を支配する世界が、必ずしも排除されるべきものだと結論することはできない。

国際化の進展の中で、民族の独自性・個性がそもそも担保されるべきなのかという問題には、自明な解答があるわけではない。我々はこの問題に最も合理的、そして現実的に答えることを常に目指す必要がある。